



登録農薬の確認

&lt;診断・防除&gt;

## ツツジ類（ドウダンツツジ） クワカミキリ

目次

ツツジ科

英名： Mulberry borer

別名： —

病原菌学名： *Apriona japonica* Thomson

《甲虫目／カミキリムシ科》

〔多発時期〕 成虫の発生は6～8月

〔伝染・侵入様式〕 周辺からの飛来

〔発生・加害部位〕 枝および幹

〔発病・発生適温〕 夏期

〔湿度条件〕 —

〔防除対象〕 成虫，幼虫

〔他の被害作物〕 ヤナギ類，ポプラ，ケヤキ，ニレ類，ブナ，クワ，サルスベリ，イチジク，ビワなど多くの広葉樹を加害する



↑虫糞の堆積：幼虫が成育するにしたがって、虫糞は円筒形となり、地面に大量に堆積するためよく目立つ。（大橋 章博）



↑成虫：ヒメコウゾを後食するクワカミキリ成虫。（大橋 章博）



↑枝枯れ被害：幼虫の食害によって、発生した枝枯れ。（大橋 章博）



↑被害初期：排糞孔から出る樹液に粉状の虫糞が枝に付着して目立つ。被害初期の目安となる。（大橋 章博）



↑脱出孔：6～7月に成虫が羽化したあとの脱出孔。（大橋 章博）

## (1) 被害のようすと診断ポイント

### 発生動向

庭木での発生事例は少ないが、公園などでは普通に被害が認められる。特に、公園や街路樹のケヤキで多く被害がみられる。

温暖化の影響なのか、被害は拡大する傾向がみられる。

## 初発のでかたと被害

8～9月ころ、枝に小さな虫糞孔がつくられ、粉状の虫糞を排出する。

## 多発時の被害

繰り返し被害を受けると衰弱して枯死したり、風や雪で折損する。

## 診断のポイント

枝や幹に1.5～3mmほどの小孔をあけ、粉状や円筒状の虫糞を外に排出する。このため、他のカミキリと異なり、坑道内は空洞である。

若齢幼虫期は虫糞が樹液と混じって柔らかくなり、枝幹や葉に付着するため、初期被害を発見する目安となる。

幼虫が成長するにしたがい、虫糞は円筒状になり、大量に地面に積もるため、被害が目立つ。

虫糞を排出する孔の間隔は、若齢幼虫期では短く、5cm程度、成長するにしたがって間隔も長くなり、15～20cmほどとなる。

この虫糞排出孔を上方へたどっていくと、馬蹄形の産卵痕がみられる。

## 防除適期の症状

枝や幹に1.5～3mmの小孔を認め、虫糞の排出が確認された時点で防除する。

## 類似症状・被害との見分けかた

ゴマフボクトウやゴマダラカミキリの被害とよく似ているが、虫糞が円筒状であることや、小径枝に特徴的な産卵痕がみられることから区別できる。

## (2) 病原・害虫の生態と発生しやすい条件

### 生態・生活サイクル

一世代を完了するのに要する期間はホストによって大きく異なり、クワでは2年で完了するが、ドウダンツツジでは数年を要する。

成虫は6～7月に羽化し、さまざまな広葉樹の枝を後食する。主に前年枝の樹皮を環状にかじるため、枝の上部が枯死したり、折損する。

産卵は7～8月に多く、太さが1～2cmの枝や幹の分枝部に行なう。樹皮をU字型に噛み切り、その樹皮下に1個ずつ産卵する。そのため、産卵部は盛り上がり、馬蹄形の特徴的な産卵痕となる。

幼虫は辺材部を下方へ向かって食害し、樹皮面に排糞孔をあける。幼虫は生育を完了するのに2～3m食害するため、ドウダンツツジのように幼虫が食害できる部分が少ない樹種では、樹幹内を上下方向に何度も食害する。このため、木が衰弱して枯死したり、風や雪で折損する。

### 発生しやすい条件

特になし。

## (3) 防除のポイント

### 耕種的防除

発生初期に被害部を剪定、除去する。

### 生物防除

なし。

### 農薬による防除

虫糞を排出している孔付近に幼虫が生息しているので、その穴から殺虫剤を注入することが有効である。

しかし、ドウダンツツジにおける本種に対する登録農薬はない。

園芸用キンチョールEがイチジクにおいて登録がある。

#### 効果の判断と次年度の対策

虫糞孔から排出する虫糞の有無で判断する。

- 執筆 大橋 章博（岐阜県森林研究所） （2008年）

登録農薬の確認

  
もどる